≪西洋史研究室の現在≫

専任教員の講義

平成 30 年度　西洋史学特殊講義　担当：教授　南川　高志

前期の本講義は「ローマ帝国の成立に関する政治史的・社会史的研究」と題して、共和政ローマ国家の初期の社会構成や国家機構について解説した後、ローマがイタリアを支配下に入れた前 3 世紀前半から説明を始めて、前 2 世紀の後半にローマという名の「帝国」が「成立した」と見なせる事態に至るまで、その歴史的展開を解説した。

後期の本講義は、「ローマ帝国の完成と変質に関する政治史的・社会史的研究」と題して、前期の講義を踏まえ、まず帝国化したローマ国家がローマ皇帝を生み出すに至った経緯を説明した。ローマ皇帝が誕生してローマが帝国となったのではなく、ローマが帝国化したためにローマ皇帝を生み出すことになった事情を解説したわけである。さらに、皇帝政治の成立後の 1～2 世紀に帝国の諸地域に生じた変化を、いわゆる「ローマ化」概念を問題として取り上げながら解説し、「完成」へとたどり着いたローマ帝国がいかなる実態のものであったのかを説明した。

以上の講義により、ローマという世界帝国がいかにして成立し、また完成へと至ったのかを、限られた局面だけではあるが説明したことになる。帝国が変質し衰退する点については、見通しを述べるにとどまったが、後世の「帝国」のモデルとなったローマ帝国の歴史的特質を、重要な点だけでも伝えることができたのではと考えている。

平成 30 年度　西洋史学演習 I（西洋古代史演習）担当：教授　南川　高志

この授業は、ギリシア・ローマ史を中心とする西洋古代史の研究を本格的におこなう能力を養成することを目的とする。外国語で書かれた研究文献を用いて、欧米学界の水準や史料の扱い方を学ぶとともに、欧米の研究の問題点をも理解し、受講者自身の研究の深化に繋げることが課題である。昨年度の西洋古代史演習では、「古代都市」を取り上げた。古代ギリシアのポリスはもちろんのこと、ヘレニズム時代でもローマ帝国時代でも、古代世界の世界史的意義を成す社会のあり方は都市的社会であり、文化もまた都市を基盤に成立したとされてきた。都市は古代史のきわめて重要な研究テーマであり、これまで数多くの優れた研究が発表されてきている。ただ、近年の研究は、地域ごとに都市の史料の分析と考察が一層精緻になったものの、都市の全体像を描き出すことが難しくなってきている。このような学界状況の中で、2017 年に都市の概念から始めて政治経済に至るまで包括的に扱った Arjan Zuiderhoek, *The Ancient City*, Cambridge University Press が刊行されたことは貴重であり、これを基本テクストとして読み、古代都市に関わる諸問題を討論した。教員と受講生はともに、ギリシア・ローマの都市の景観・政治・経済から社会層やエヴェルジェティスム、そして都市の終焉まで、広く学び考えることができた。

平成 30 年度　西洋史学講義　担当：教授　小山　哲

この授業は、2 回生以上の学部生を対象に、専門分野としての西洋史学への入門講義として毎年、通年の授業として開講されている。西洋史学専修の専任の教員が交替で受けもっており、本年度は小山が講義を担当した。

講義の内容は、基本的にはヨーロッパ史学史である。「ヨーロッパ世界では、歴史をどのように認識してきたのか。また、歴史を研究する視角や方法は、時代の変化にともなって、どのように変化してきたのか」という問題をめぐって、古代から現代までのヨーロッパにおける歴史認識の歴史を、各時代の全般的な状況をふまえながら概観し、それぞれの時代の歴史叙述の特徴や、歴史研究の方法をめぐる議論を紹介する、という方針をたて、授業をおこなった。前期は、ナショナリズムと歴史研究とのあいだに成立する複雑な関係やヨーロッパ中心史観の問題点に触れた導入ののち、古代ギリシアの歴史叙述（ヘロドトス、トゥキュディデス）からはじめて、19 世紀のランケ史学の成立までを概観した。後期は、日本における「西洋史学」の成立の経緯を京都大学の西洋史研究室の歴史と関連づけながらたどったのち、歴史学と社会科学との関係をマルクス、ウェーバーとの関連で解説し、アナール学派の展開の過程を概観した。最後のほうで時間が足りなくなり、現在の歴史学におけるいくつかの論点（ナラトロジーの問題、デジタル・データの利用をめぐる問題、時代区分の再考など）について十分にとりあげることができなかった点は反省点である。

受講生には、前期・後期各 1 回、レポートを提出してもらったが、全体として、学生のあいだで人文・社会科学の古典に触れる機会が少なくなっており、歴史学とその関連分野で 19 世紀後半から 20 世紀にかけて共有されてきた用語法や認識の枠組みが十分には継承されていないのではないかという印象を受けた。古い枠組みにとらわれる必要はないが、学問史的な経緯についての知識がないと、新しい発想による議論を歴史的な文脈をふまえて展開することもできなくなる。学生たちが抱えるこうしたギャップをいくぶんなりとも埋める機会を提供することも、この講義の役割の一つであろう。

平成 30 年度　西洋史学演習Ⅲ（西洋近世史演習）担当：教授　小山　哲

本年度の近世史演習は、前期のテキストとして、Judith Pollmann, *Memory in Early Modern Europe 1500-1800*, Oxford: Oxford University Press, 2017 をとりあげた。著者のポールマンはライデン大学でオランダ近世史を担当しており、*Past & Present* 誌の編集委員会のメンバーでもある。本書は、2008 年から 2013 年にかけて行われた研究プロジェクト「革命のさまざまな語り――低地地方における記憶、忘却とアイデンティティ、1566～1700 年」の成果をふまえてまとめられたものである。序論と結論のあいだにおかれた本論は 7 章で構成され、個人の記憶（第 1 章）、歴史的先例と現在の認識との関係（第 2 章）、慣習的な「過去」の

再利用（第 3 章）、共同体の記憶（第 4 章）、伝説・神話と記憶の関係（第 5 章）、「忘却」の社会的・政治的機能（第 6 章）、暴力の記憶とトラウマ（第 7 章）がとりあげられている。具体的な検討の素材は、著者の専門を反映して低地地方の事例からとられたものが多いが、議論の運びはヨーロッパ史的な文脈を意識したものになっている（ただし、北欧と東欧はほぼ視野の外におかれている）。全体として、私たちは、本書をとおして、近年のメモリー・スタディーズのインパクトがヨーロッパ近世史の研究にどのようなかたちで波及しているかを知ることができる。また、この研究領域で近世という時代に固有の特徴や論点があるとすればそれはどのようなものか、また、近世の史料を素材として記憶の問題にどのようにアプローチするべきか、といった問題を考えるうえでも、ポールマンの記述は豊富な議論のヒントと示唆を与えてくれる。

担当者が個人的に興味深かったのは、ポールマンが発展段階論的な発想をとらず、たとえば「印刷革命」の影響についても、「手書きから活字へ」という単純な発展史ではなく、活版印刷という新しい技術の出現によって口承や手書きのような従来の伝達手段の新たな活用がはじまり、そうした変化を含みつつコミュニケーション体制の編制替えが起るという見方を提示していることであった。これは、かつて京大人文研の共同研究「コミュニケーションの社会史」（1995～1998 年、論集の刊行は 2001 年、ミネルヴァ書房）で、班員のあいだで議論を重ねて最終的にたどりついた認識とほぼ重なっている。私たちの共同研究の方向がまちがっていなかったことが確認できてうれしかったが、20 年前の議論を英語で発信していれば…という思いも胸をよぎった。

本年度の演習では、受講者の個別発表のほか、ポールマンの著書のテーマとの関連から、コミュニケーションや記憶の問題にかかわる論文を読んで議論した。とりあげたのは、以下のような文献である。J. Pollmann, *“Archiving the present and chronicling for the future in early modern Europe”*, in: L. Corens, K. Peters and A. Walsham (eds.), The Social History of the Archive: Record-Keeping in Early Modern Europe, *Past & Present Supplement 11*, 2016, pp. 231-252;　M. Fumaroli, *“The Republic of Letters”*, Diogenes, vol. 143 (1988), pp. 129-152; Peter Burke, *“Culture of translation in early modern Europe”*, in: P. Burke (ed.), *Cultural Translation in Early Modern Europe*, Cambridge 2007, pp. 7-31; Ann Blair, *“The rise of note-taking in early modern Europe”*, Intellectual History Review, 20-3 (2010), pp. 303-316; Alexandra Schäfer, *“How to visualize an event that is not representable? The topos of massacre in François Dubois’ St. Bartholomew’s Day Massacre”*, in: H. Aali, A.-L. Perämäki, C. Sarti (eds.), *Memory Boxes. An Experimental Approach to Cultural Transfer in History*, 1500-2000, Bielefeld 2014, pp. 27-54.

平成 30 年度　西洋史学特殊講義　担当：教授　金澤　周作

観念的で政治的な傾きの強い思想の歴史と、実践的で社会的な側面が強調されがちなチャリティの歴史は、これまで強く結びつけられてこなかった。それを補強するという意図

もあり、前期には、ヴィクトリア期イギリスにおいて、知識人がチャリティをいかなる思想および実践上の課題として捉えていたかを検討するために、美術・建築批評家、社会改革家、社会評論家、思想家、ヴィジョナリー（教師）として当時巨大な影響力を持ったジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819-1900 年）を取り上げた。今回は日本語の諸研究および英語の伝記類を参照しつつ、ラスキンの著作や書簡を網羅したライブラリー版全 39 巻を主たる史料にして、ラスキンが遺したチャリティに関する言及を網羅的に分析した。そして、ラスキンのチャリティ思想は大筋で当時の「常識」の範囲内に収まるものであったが、チャリティに立脚した「美しい」理想社会の実現のため、妥協なく実践した点に、その特殊性があるとの暫定的な結論を得た。

後期には、数年前から取り組んでいる近世地中海における北アフリカのバーバリ諸国家からのキリスト教徒虜囚の救出（身代金支払いによる身請け）をめぐる諸問題を講じた。同じ時期に黒人奴隷貿易が展開した大西洋とは異なり、地中海ではキリスト教徒とムスリムが主体となり相互的に独特な白人奴隷貿易が行われていたといえる。最大の関心は 18 世紀半ば以降にイギリスのチャリティ財団が遂行していた救出活動の再構成にあるのだが、今回の講義では、その歴史的前提となる近世地中海世界の特徴を解説することに力を注いだ。なかでも、近年フランス語や英語でも重要な研究が相次いで発表されているトスカーナ大公国の自由港リヴォルノに着目して、ここにともに居留したカトリック教徒、プロテスタント、ユダヤ人、およびムスリム奴隷の境遇について、対岸のキリスト教徒奴隷との関連にも言及しながら、詳論した。

平成 30 年度　西洋史学演習Ⅳ（西洋近代史演習）　担当：教授　金澤　周作

前期のテキストとして取り上げたのは、L. Benton, A. Clulow and B. Attwood (eds.), *Protection and Empire: A Global History* (Cambridge University Press, 2018)である。編者の一人ローレン・ベントンは、法制史的アプローチで近世以降の帝国や世界の秩序の理解に精力的に貢献してきた注目すべき歴史家である。この論集は、「保護」という一見あいまいなキーワードを設定することで、欧米由来の法により厳密に定められてきたと想定されがちな、近世以降の支配・被支配の関係――国家、帝国、国際関係――の形成過程が、実は多元発生的で経路依存的であったことを明らかにする。

南米でのとあるインディオ集落の「保護」の意味変容、近世の下ヴェーザー川における安全航行の保証の裏に潜む支配の思惑、海や陸の「政体間ゾーン」での（同盟関係を含む）「保護」の主張が帝国を創り出していく経緯、イングランド政治思想史上の「保護」概念の変遷、アイヌを主体的な他者とみなす「撫育」から臣民とみなす「保護」へ移行する 19 世紀日本の政策、19 世紀のマオリやアボリジニ、20 世紀の西アフリカ諸部族や中東ベドウィンが積極的に関与して成立した「保護」の特徴といった、テーマ的にも時間的、空間的にも非常に幅広い論文に触れることができた。グローバル・ヒストリーにつきまとう西洋

中心主義を脱却する試みとして、見るべきところの多い論集であった。毎回、論文のエッセンスが黒板一杯に書き出され、さまざまな論点をめぐり活発な議論が行われた。

7 月 13 日には、OB の君塚弘恭氏（早稲田大学）が招聘された K. Le Doudie 氏に報告をしていただいた（近世史演習と合同）。ポンディシェリに住むフランス人の物質生活を実証的なデータに基づいて再構成していく内容は興味深いもので、講演後の質疑応答には院生や学部生も手を挙げ、活発なやりとりがなされた。

後期の自由発表では、それぞれの研究の最前線を見せてもらうことができた。とくに、人文研の学振 PD だった八谷舞さんが長期留学の成果の一端をみごとに報告してくれたのが印象的で、学部生・院生ともに大いに刺激を受けたと思う。